大西巨人氏を偲ぶ

――『神聖喜劇』『深淵』など――

平岡敏夫

大西巨人氏は二〇一四年三月十二日に死去された。九十七歳であった。朝日、読売、毎日の訃報の記事、続く追悼文、「群像」「文学界」「すばる」の追悼特集、「週刊読書人」の特別討議、『大西巨人』（河出書房新社）、「東京新聞夕刊」「大波小波」の何度かの言及など、眼にふれるものは読んだ。むろんこれらの追悼記事、追悼発言を読んだからといって、大西巨人氏がもうこの世にいないという悲しみが薄らぐはずはなく、今なおそれは深まるばかりだ。

文芸四誌は「群像」が三人、各見開き二頁、「文学界」が一人、三頁、「すばる」が二人、各三頁、書き手の誠意は疑わないが、三誌ともお義理の感じであり、「新潮」は特集をしなかった。文壇的にもっとも正直だと思った。見落としがあるかも知れないが、これまでジャーナリズムや文壇は大西巨人氏をほとんど取りあげなかった。あえて記すが、私はずっと一貫して朝日賞の推薦に大西巨人氏一人をあげてきた。毎回、大西巨人氏よりはるかに若く、はるかに及ばぬと思う人が受賞し、選考委員も同様だった。賞の推薦など何だという人があるかも知れないが、今年も推薦の時期がやってきたけれども推す人はいない。私は今年で推薦をやめるが、私ごときのこのような些事を記すのは逆に大西巨人氏のジャーナリズムや文壇が測り知ることができなかった存在の大きさを示すことにもなるかと思うからである。

『神聖喜劇』の東堂二等兵がいつの間にか一等兵と記されているをあやまりではないかと大西巨人氏にハガキを出し、御返事を頂戴したことが個人的接触のはじめとばかり記憶していた。何度見ても正確でふくよかな魅力的な文字のハガキには（ハガキそのものをコピーで紹介したいが、自身宛とはいえ、私信であるからきれぎれの引用にとどめよう。以下同様）、「拝復おはがき拝見」とあって「お言葉ならびに誤植指摘のこと」への謝辞があり、例の誤植は「他の若干の誤植および字句訂正とともに」再刷分において「象嵌によって」訂正せられたとある。私はこの「象嵌によって」とあるところを鮮明に記憶していた。この一事をもってしても大西巨人氏の全容をうかがい知ることができると思っている。「なにしろ御好意を感謝します。とりあえず右まで。匆匆、十二月二十一日」としめくられているのだが、すでに「一等兵」は「二等兵」に訂正されており、一読者がハガキをよこしても黙殺するのがほとんどの作家の常だろう。自称ウルトラ・スローモー（津野海太郎「大西巨人氏を悼む」東京新聞夕刊2014・3・17）の大西巨人氏がこのような丁重な返事を書くのである。

これは一九七一年（昭46）十二月二十一日付であるが、実はこの

半年も前に、「お便りと『新版日本文学史』とありがたく頂戴いたしました」ではじまるハガキがあったのである。「ちとごたごたしていましたため、お礼が遅くなりました。御宥免下さい」と続く。ごたごたしているのが収まったからとて返事を書く必要はなく、多くの作家はゴーマンにも（私がそう感じる）無視するだろう。「御宥免」という表現も大西巨人氏ならではのものと思うが、その先がある。その前に『新版日本文学史』（秀英出版）とあるのは、近現代文学史を担当した私が、高校・一般対象の文学史とはいえ、大西巨人『神聖喜劇』をはじめて文学史に書き込んだと自負していたものだった。「先夜は、めずらしく座談会に出て、どうもつまらぬことのみしゃべったようで、大兄にも益田氏にも恐縮でした」と続くが、これは益田勝実氏と私が大西巨人氏を迎えての「鼎談」（「国語通信」昭46・6・筑摩書房）のことである。

「国語通信」というのは筑摩書房刊の高校国語教科書に関わる雑誌で、国語教科書に吉田満『戦艦大和の最期』が採録されたのを機会に「国語」としての戦争体験を考えてみようということで、大西巨人氏をお招きしたのだった。「私の作についていろいろ激励を下さって、私は大いに元気をつけられました（お手紙の中で）。御自愛を祈ります」と前掲ハガキは結ばれているが、四十三年前とはいえ、文字どおりの〈巨人〉が四十歳をこえたばかりの一介の教師に「私は大いに元気をつけられました」と書く大西巨人氏には、いま思い起こしてもその人間的偉大さに限りない敬慕の念を覚えざるを得ない。

ことのついでにこの「鼎談」に少しふれておこう。（一部は小文「ある戦後――大西巨人『神聖喜劇』――対馬への旅――」で紹介。拙著『ある文学史家の戦中と戦後』1999・9、日本図書センター）。巨人氏は言う。

……たとえば「神聖喜劇」の大前田軍曹だって、ただ向うへ行ってたくさん虐殺したとか、忠勇無双の鬼下士官というだけの人物じゃない。したがって、「戦艦大和の最期」でも、発表当時、軍国主義の鼓吹だという意味の言い方もあったとか、いろいろありますけれども、海兵とか特殊な軍隊の学校を出た人じゃなくとも士官になり、その中で吉田さんがこういうふうな気持ちで戦争、特に最期の出撃に行かれたというような作品、その中に非常に微妙な気持ちのニュアンスも描かれているわけです。単純に反戦的なもの、軍隊否定的なものが当時出ていた。そういう敗戦直結・占領下の風潮の中で、このようなものはどっちかというと大勢として否定的な空気もあったかと思いますけれども、そういうものを単に否定的にみるような、そういう戦争の見方、あるいは軍隊の見方だけではとても物事は解決せんだろうという感じがいたします（後略）。

今度の追悼記事の中でも、「非人間的な軍隊組織に抵抗する兵士を描いた長編小説『神聖喜劇』で知られる作家の大西巨人氏」（朝日）と書き出すような見方が多いように思われたが、たしかに「非人間的な軍隊組織」ではあるけれども、人間的な余りにも人間的なのが軍隊であって、「そういうものを単に否定的にみるような、そういう戦争の見方、あるいは軍隊の見方だけではとても物事は解決せんだろう」。大前田軍曹にしても、ただ虐殺したとか忠勇無双の鬼士官というだけの人物ではないのだ。

『神聖喜劇』の方法にふれたもうひとつの例を引こう。益田勝実氏が軍隊の中で生きていたときと違って、作品の世界に客観化してみようとした場合、意外に自分が掴んでいた体験としての軍隊生活と違う面がたくさん出て来たのではないが、旧軍関係の膨大な資料が作品に出てくるが、一兵卒であったとき締めつけられて苦しんでいたのが実はこういう諸規定で出来あがっていたことがあとでわかった云々の発言をしたのに対し、大西氏はそれを否定して次のように言っている。

そういうと、なんだかやっぱり自分の作品のことを話すようなことになりますけれども、今のお話のようなことはないんです。まったくないというとどうかと思いますけれども、軍隊の諸規定というものが軍隊の中にあって、それが何を意味するかというようなことについては「神聖喜劇」を書きはじめてから気がついたという類のことはないと言っていいんです。今のお話を聞いていてそう言うと、いかにも私がその当時から物事が何もかもわかっとったようなことになってちょっと恐縮ですけれども、小説の場合あることを調べて書くということは、もともと自己に内在する何物かとの相関関係において調べるのでなければ、だめだ。軍隊関係の、内務書とか歩兵操典とか、その他もろもろの諸規定を読んで、推理小説を書くみたいに何かを発見して、この条文と条文に穴があるということを使ったりするというのは、なかなか出来ないんじゃなかろうかという気がするんです。

右の大西巨人氏の発言は、一般の評論家・研究者が考えそうなこととはまるで違っている。『神聖喜劇』独自の方法について語った重要なものだが、前掲小論での私のコメントを引いておきたい。「東堂の軍隊諸規定の掌握ぶりは、あとから推理小説を書くように、資料を読み、それにもとづいて組み合わせたものではなく、実際に作者自身がもともと自己に内在する何物かとの相関において当時から浮かびあがっていたものであり、必然的に軍隊諸規定とのかかわりは、『神聖喜劇』として息づいていたのだ、と言ってもよいのである。人工的に超人（スーパーマン）を作って軍隊に挑戦させるといった作品ではまったくない」。

中学校から士官学校へ行けるのに、五高から士官学校へ行った村上少尉についての私の質問も出ているが、軍隊ほど娑婆の学歴を重んじているところはないんじゃないか、軍隊は世間、娑婆と変わらないといった私の発言に対して、大西巨人氏は、そういうことはわかる、というのは軍隊には、ある取柄があるとして、一方では学歴が物を言うが、「特に兵隊の間では、それとは矛盾しない意味で裸の人間が物を言う。学校を出るとか学校を出とらんとか、金持ちとか何とかということは抜けて、軍の上からの関係における学歴が物を言うんじゃなくて、仲間としてのね。そうしますと、人間として立派な者は、百姓であろうが、それとして何となく尊重されているというようなことがありますね」と語っている。

それは全くそのとおりで、私は十四歳から十五歳にかけての一年半の陸軍内務班生活の中で、人間として立派で、尊敬されていた高等小学校卒の下士官、内務班長を、何人か見てきている。ただ私が娑婆の学歴や、その人間の階層、父が将校であったり、伯父が将官

であったりする少年（たいていは名門中学校出身）が軍学校入校において最終的には合格に有利にはたらくことを、身にしみて知っているからこそ発言したのであった。高小卒では幹部候補生試験は受けられないし、商業高校、工業高校、国民学校出身では陸幼の入試に、たとえ高得点を得ようとも入校はきわめて困難である。このような見聞・体験からの発言であって、大西巨人氏の発言と矛盾はしないが、このような意味でも軍隊はけっして「特殊の境涯」でも〈真空地帯〉でもなく、「最も濃密かつ圧縮的に日本の半封建的絶対主義性・帝国主義反動性を実現した典型的な国家の部分」（大西巨人）なのである。

手元にある二枚のハガキのうち（まだ何枚かあるが）、はじめのハガキから、つい、「鼎談」にまで及んでしまったが、それより前だっただろうか、国会図書館でカードを机の上に引き出し、めくっていたとき、偶然同じ長机の上で大西巨人氏がカードを操っていたのだった。はじめてお会いしたようではなかったから、すぐ立ち話になったのだが、まことにうれしく、なつかしかった感情は今も残っている。直接お会いしてこれほど温厚で礼儀正しい年長者に会ったことはないと思うほど、大西巨人氏は魅力的な人である。対馬の話は出なかったかと思うので、私の対馬行きの前かも知れないが、大宮でウナ重を一緒に食べながらお話をうかがったことがある。桶川在住の評論家松本鶴雄氏の企画によるが、大西巨人氏は大宮駅近くの店にくるまで五十メートルおきに小休止したという。今思えば、まことにもったいないことであったと思うが、何を話したかが明瞭でないのはさらにもったいないことだ。しかし、ウナ重を食べながらの大西巨人氏の存在感だけははっきり記憶に残っている。

対馬の重砲兵聯隊の跡を訪ねた後、撮った写真を何枚かお送りし、そのあと、電話をいただいて三十分以上（と思うほど）お話した記憶もある。また、ある文芸雑誌で知名の評論家が戦争と文学の対談を行っていたが、一言すらも『神聖喜劇』にふれていなかったことについて、これは私の義憤か公憤か、大西巨人氏と長電話をしたこともあった。あれもこれもなつかしく有難いことであったが、対馬行きのことについてふれておきたい。

対馬行きを記すにあたり、私は次のように前置きしている。「野間宏『真空地帯』（昭27）などによって知られる軍隊内務班の実態が、〈真空地帯〉どころか、〈娑婆〉以上の娑婆、現世以上の現世として、エリート将校から被差別の出自・職業の兵に至るまで、驚嘆すべき密度と方法によって描き出されており、まさに〈神聖喜劇（ディヴァインコメディ）〉の名にふさわしい空前絶後の長篇というしかない。／ここで私のできることは、せめてこの長篇の舞台となった対馬を訪ねて行き、対馬要塞重砲兵聯隊跡に立ち、『神聖喜劇』と作者大西巨人への思いにひとりふける、といったことでしかないのであり、そのひとりよがりの行動によって、作品の一面にふれてみたいというだけのことである」。対馬より私が出したハガキの返信に、大西巨人氏は「私は戦後一九六六年に一度だけ短い日数対馬に行きましたが、そのころはまだ厳原～鶏知間の道路にホソウがしてなく、私の乗ったタクシーの数十メートル先を一台のトラックが走っていて、激しい土煙をこちらは浴びたことでした」と書いている。『神聖喜劇』は一九五五年起筆、一九七八年擱筆であるから、大西巨人氏は執筆中に、対馬

を再訪していることになる。起筆して十一年目、擱筆の十二年前の再訪である。中途で対馬を再訪しなければならなかったのはなぜか。『神聖喜劇』を考える上でも参考になろう。梅崎春生の『幻化』（昭40）の主人公五郎は敗戦を迎えた鹿児島県西南の坊津へ二十年ぶりに再訪するが、これは作者自身の再訪の旅に重ねての紀行文スタイルの作品である。大西巨人氏が対馬再訪の紀行文スタイルで作品を書かなかったという事実を確認したことであった。

再訪の大西巨人氏が激しい土煙を浴びた鶏知への道は、東堂たち入隊兵が隊伍を組んで深夜、厳原から鶏知の屯営に向かって約十二キロの行軍をした道である。私は台風のあとの小雨まじりの強風の中、バスで鶏知に向かった。分からぬままに途中でバスを降りてしまって、道を尋ねた婦人に痛棒を食らう〈事件〉もあったが、それから先を徒歩で鶏知に入り、兵営のあたりを尋ね尋ねして、「対馬要塞重砲兵聯隊趾　終戦聯隊長坪内八洲夫謹書」の碑文に行き当った。碑文は前掲書に掲げているので略すが、要するに何もなかったのと同然の空白だった。「こんな空白を、戦後十五年にして、埋めはじめ、戦後三十三年にして、壮大かつ緻密な〈神聖喜劇〉を完成し得た大西巨人氏の大業をあらためて思った。対馬要塞重砲兵聯隊趾にただ空白を見出したことによって、遂に『神聖喜劇』は壮麗かつ重厚な建造物として、新しく浮かびあがってくることになった」と私は書いている。

あともう一つ、思い起こすのは『深淵』（２００４・１）のことである。すでに「透谷と私」（２００４・６「北村透谷研究会会報」第14号）で書き、「透谷とゲオルグ・ビュヒナー」（『北村透谷　没後百年のメルクマール』所収、２００９・４）でも『深淵』とビュヒナーを論じている。『深淵』下巻で、松浦市の呉服店の息子山本和成が日記に、中野重治、保田与重郎の透谷評価の言を引きつつ、透谷をビュヒナーに擬し、透谷の近代日本文化・文学におけるは、ビュヒナーの近代ドイツ文化・文学におけるがごとし、という見解を書きつけている。詳細は前掲小論に譲るが、大西巨人氏自身の反応は早大大学院（ドイツ文学）の院生たちによるインタビューに出ている。

二〇〇五年十月、大西巨人氏の自宅でのインタビューは「Angelus Novus」（２００６・３）に掲載されており、大西巨人氏の依頼によるとして、私宅に一冊送られてきた。私の名前が出ており、引きにくいが、大西巨人氏の声をじかに聞く思いで引いておきたい。ドイツ文学への親しみにふれた箇所である。

ほかにも、古くはビュヒナーとかね。ビュヒナーのことは小作『深淵』（光文社）でも書いています。この人は平岡敏夫という北村透谷とか明治文学とかの研究で名高い文芸家（筑波大学名誉教授、群馬県立女子大元学長）で、これはその平岡氏が送ってくれた本（本を手に取って）『第七回北村透谷研究会』です。読み上げると、「ゲオルグ・ビュヒナーと透谷、一昨日大西巨人『深淵』上下を読了。記憶喪失を設定して生と存在との深淵に臨んだ人間の根源的謎に迫り」云々と書かれてあり（以下略）

大西巨人氏はもう世にいない。作家としても人間としても無類、最良の人を失ったが、大西巨人氏の大業は不朽である。

（２０１４・８・１５）